
ショーペンハウアーにおける美的観照の問題

— 『意志と表象としての世界¹』及び、初期著作における天才のアイデアの認識と身体性をめぐって

西山 友子

序論

ショーペンハウアーにおける美的観照 (die ästhetische Kontemplation) とは、プラトンのアイデア (die Platonische Idee) を認識することだとされる (WI,206)。アイデアを認識する能力に長けた天才 (Genius) は、自身が認識したアイデアを芸術作品において再現する。他方で天才以外の人々は芸術作品において、天才と同じようにアイデアを認識することが可能でもある² (WI, 229)。このようにショーペンハウアーにおける芸術体験は、アイデアの認識と切り離せない関係にある。ではこの美的観照におけるアイデア認識とは一体どのような事態であろうか。「プラトンのアイデアは、必然的に客観であり、認識されたものであり、一つの表象なのである」(WI,206)とあるように、彼はアイデアを一表象であると考えた。とはいえ、それがいかなる表象であるのかが問題であろう。更に、アイデアを把握する「純粹認識主観 (das reine Subjekt der Erkenntniss)」(WI, 209) とは、いかなる主観であるのか。

以上の問題意識の下、第一節においては、想像力に注目することで、アイデアがいかなる表象であるのかを問う。そうして第二節、第三節においては、アイデアを認識するのはいかなる主観であるのかということ、身体性に注目し、問うていこう。以上の考察を通して本稿は、ショーペンハウアーにおける美的観照の問題を解明するための、認識論的な基礎研究を目指すものである。

1、想像力によるファンタスマとしてのアイデア

アイデアがいかなる表象であるのかということ、を考察していくため、最初に「想像力 (Phantasie)」(WI,48) に注目しよう³。ショーペンハウアーは以下のような理由から、天才性 (Genialität)、つまりアイデアを認識する能力に想像力が欠かせないものであるとする⁴。

現実に目下映って見える客観は、ほとんど通常、示されるアイデアのきわめて欠陥の多

いサンプルであるにすぎない。したがって天才が想像力を必要とするのは、事物のなかに、自然が現実形成し終えたものを見るためではない。そうではなく、自然が形成しようと努力はしたが、〔…中略…〕ついに形成を果たし得なかったものを、事物のうちに見るためなのである。(WI,220)

ショーペンハウアーはアイデアを「いっさいの自然の物体がもつ根源的で変化することのない形態であり特性」(WI, 199) であるとし、個別的なものに対する「模範 (Vorbild)」であるとする (Ebd.)。我々が通常認識している感覚対象は、時間・空間において変化し続けるため、アイデアとはなりえない⁵。そこで必要となるのが想像力なのである。アイデアとは「個々の手近にある事物のなかで不完全にしか現存しないもの、また変容を受け弱められて現存するにすぎないものが、天才のものの見方によって〔…中略…〕、完全なものに高められた」(WI, 228) ものであり、「理想 (Ideal)」(WI,262)なのである。

このような理想は、感覚器官を通して認識されることはないが、それでもやはり表象である。というのもショーペンハウアーは、感覚器官を介さないで認識される表象、「ファンタスマ (Phantasma)」を考えていたからである。彼はファンタスマに関して、『充足根拠律の四方向に分岐した根について (第一版)』⁶において、以下のように説明する。

かつて何らかの表象が身体⁷の仲介で主観に直接現在したとしよう。主観はその表象を、身体の仲介によらず、意のままに時には表象の順序や連関をも入れ替えて再現できる。私は、そのように再現されたものをファンタスマと呼び、再現する能力を想像力〔…中略…〕⁸と呼ぶ。(Go,27)

具体的な例をあげて、上の文章を説明しよう。我々は人魚を実際に見たことはないが、人間と魚であれば見たことがある。そうして上半身が人間で下半身が魚である生き物を、想像力によって思い描くことができる。この思い描かれたものこそがファンタスマなのである。アイデアは感覚器官を用いて認識されることがない表象という意味では、ファンタスマなのである。とはいえ、空想による産物が全てアイデアになってしまう訳ではない⁹。というのもアイデアは「普遍的なファンタスマ」だからである。では、その普遍性はいかにして可能となるのか。

2、アイデアの認識における身体性と個性

第一節において、アイデアが想像力によって産み出される、事物の理想としてのファンタ

スマであることが明らかになった。しかし想像力に注目するのみでは、アイデアがなぜ普遍的であるのか、という問いが残ってしまう。そこで本節では、通常の感覚的認識からアイデアの認識に至る、以下のような認識主観の変化の過程に注目する。

個々の事物の平凡な認識からやがてアイデアの認識へ移っていくことは〔…中略…〕突如としておこなわれる。すなわち、認識が意志への奉仕から解き放たれ、ほかでもない、そのことによって、主観が単なる個体的な主観であることをやめ、いまや意志のない純粋な認識主観となるのである。(WI, 209)

アイデアが普遍的であるのは、上で述べられているように、それを認識する主観が非個体的な主観だからなのではないか。とはいえ、認識主観が個体でなくなるとはどういうことであろうか。純粋認識主観とは一体何であろうか。実は、このような主観の変容には、身体性が深く関わっている。というのもショーペンハウアーは「認識主観が個体として現れるのは、身体と一体をなしているから」(WI, 119)と考えているからである。さらに彼は、「意志」と身体(Leib)とが一体であると考え(WI, 122)。この「一体(Eines)」についても検討しなければならないが、少なくとも主体における身体性の変化のあり方を検討することで、引用における「認識が意志への奉仕から解き放たれる」という主張も理解できるようになるのではないかと¹⁰。

「個体であること」はどのようにして「身体を持つこと」と関わっているのでしょうか。天才の認識・アイデアの非個体的な認識を理解するため、逆に個体の認識・個別的な事物の認識について考察しよう。ショーペンハウアーは個物の認識が、身体においてはじまると考えた(WI, 22)。このことは、「感性的な感覚」をもって認識がはじまる、と言い換えれば理解しやすいであろう。更にショーペンハウアーは、時間・空間をあわせて「個体化の原理(principium individuationis)」と呼ぶ(WI, 134)。事物を時間的・空間的に認識することが、事物を個体として経験することになるのである¹¹。さて、時間的経験にも、空間的経験にも、やはりそれらの経験の起点となる自己の身体が必要となると考えられる。というのも時間における個物の把握には、持続して存在する自らの身体への意識が常に伴うからである¹²。空間における個物もやはり、自らの身体を起点として把握されるのである。このように、時間・空間に限定される身体の感性的なあり方をもって認識される対象は、すなわち個体としての認識主観に認識される対象は、やはり個体となるのである。

個体としての認識主観はアイデアを認識することがない、ということの意味が明らかになった。従ってアイデアを把握する純粋認識主観は、身体を持たないという意味で純粋と言われうるのである¹³。それ故、純粋な認識主観の対象は、自己の身体を起点として認識さ

れないという意味で、非個体的、乃至普遍的対象となる。つまりこの対象は、時間性も空間性も持たず、それゆえ変化することもなく、あらゆる主観にとって共通のアイデアとなり得るのである。しかしこのような対象を認識する主観はどのようなあり方をしているのか。この問いに答えていくためにも、次節では純粹認識主観と「意志」との関係を考察していきたい。

3、天才としての純粹認識主観と「意志」

主観における個性性と身体性の直接的関係が明らかになった。そこで問題として浮上したのは、純粹認識主観と「意志」との関わりである。個体は「意志への奉仕から完全に自由になることができる」という主張の内容を吟味しなければならない。本稿ではここでもやはり、身体性に注目する。というのもショーペンハウアーは、身体と「意志」とが一体であると考えからである (WI, 122)。彼は世界の本質が「意志」であると考えのだが、そういったことを知らしめてくれるのが、自分自身の身体運動であるとされるのである。以下がそれを明白に表す文章である。

意志がまず真っ先に姿を見せるのは、身体の随意運動においてである。そのかぎりでは、身体の随意運動とは、個々の意志の働きが目に見えるかたちをとったものにほかならない。個々の意志の働きとまったく同時に、そうしてまた直接的に立ち現れるのが身体の随意運動なのである。(WI, 126)

ここで述べられているのは、自分の身体を自分で動かしているといった日常的な事態である。随意とあるように、自覚的な運動を目指す「意志の働き (der Akt des Willens)」に伴う身体運動が、「意志」と身体の一体性を示しているのである。

身体の随意運動 (die willkürliche Bewegungen des Leibes) には「私は意欲する (Ich will)」といった意識が常に伴うのであるが、『根拠律』においてこの事態は、「認識主観と意欲主体の一致」と呼ばれる。「私は意欲する」という意識は、「私は私が意欲していることを認識する」と分析することができるように、認識する者と意欲する者とが一致しているからである。さらに彼はこの一致の状態を「自我 (Ich)」と呼ぶ (Go, 73)。もっぱら認識する側に立つ認識主観は、認識対象となることができない。他方で認識主観は自らを意欲の主体としては認識することができる (Ebd.)。これこそが「認識主観と意欲の主体の一致」であり、ここにおいてはじめて「自我」という自己意識が可能になる。

我々は目下、純粹認識主観と「意志」との関わりを問うてきた。「私は意欲してこの身体

運動を行っている」という意識が生じる事態、これこそ、純粹認識主観が「意志」を持つようになり、また自己の身体を持つようになる事態なのである¹⁴。先ほど、身体をもって認識を行う主観が、自己の身体を起点としてのみ事物を認識することを明らかにした。純粹認識主観は意欲主体との一致状態になく、自己意識を持たない。そのため、純粹認識主観は自己の身体との関係において認識するということができないのである。

ショーペンハウアーが考える「意志」は、「生きんとする意志 (Wille zum Leben) (WI, 175) と言われる通り、我々が生きようとする衝動であり、我々のあらゆる行為を支配する。このことは通常、認識という行為にも当てはまる¹⁵。個体としての主観は自分自身が生きるために、個物を認識するのである。ショーペンハウアーはこれを「意志に奉仕する認識」と呼び、「時間、空間、因果性のこの関係によってのみ、客観は個体にとって関心があるものとなり、いいかえれば意志に対し客観がなんらかの関わりをもつことになる」と説明する (WI, 208)。例えば、個体としてのライオンを認識する場合、私 (個体) にとっては「いつ、どこに」そのライオンがおり、私にどのような影響を及ぼし得るのかということが関心の対象となる。しかしこのような私との関係において把握されるライオンは、決して普遍的なライオン、つまりライオンのアイデアにはなりえないのである。

それに対して純粹認識主観の認識は、「観照する行為のうちに同化してしまう」(WI, 210) または、「直観の中へ自分を失う」といった認識である¹⁶。繰り返しになるが、自己意識は、「認識主観と意欲主体の一致」が生じない限りは可能にならない。それ故、アイデアを把握する純粹認識主観は自他を区別することが不可能なのである。すなわち、直観している対象、アイデアと一体となってしまう¹⁷。これはやはり「生きんとする」ためには不適合な認識であると言えよう。しかしこれこそが、身体を持たず、意志から自由になり、普遍的な対象、つまりアイデアを認識する純粹認識主観なのである。このことから言えるのは、アイデアを認識するということが、現実にある対象をないがしろにし、無視するという態度とは正反対であるということである¹⁸。無視されるのはむしろ自分自身、個体としての認識主観であって、認識対象は適切に認識されると言えよう¹⁹。

とはいえ、ショーペンハウアーにおける「意志」とは、あらゆる表象が持つ本質である。そうであるならば、純粹認識主観といった「意志」を持たない主観などがどのようにして成立し得るのか²⁰。これをショーペンハウアーはアイデアを認識する能力、天才性として以下のように語る。

天才性とは〔…中略…〕自己の関心、自己の意欲、自己の目的を完全に無視して、つまり自己の一身をしばしの間まったく放棄し、それによって純粹に認識する主観、明晰な世界の眼となって残る能力のことである。(WI, 219)

この引用で重要なのは「無視 (aus den Augen zu lassen)」と「しばしの中の放棄 (auf eine Zeit zu entäussern)」という言葉である。別の箇所では、アイデアを把握する状態は「自分の意志の忘却」(WI, 210)とも語られる²¹。このことから分かるのは、身体がなくなり、「意志」がなくなり、自己が失われるという、天才における非個体的な認識の事態が、全て意識上における出来事だということである²²。『根拠律』における以下の引用では、アイデアという言葉は登場しないものの、「意志の忘却」にちょうど当てはまる場面であると言える。

ファンタスマがきわめて生き生きとしたものとなった結果として、意識から身体が完全になくなってしまった場合は、身体が再び意識に現れない限り、われわれはファンタスマをファンタスマとして認識できない。(Go, 28)

天才における純粹認識主観は、想像力によって生き生きとしたアイデア (ファンタスマ) を作り続けることで、自身の身体や「意志」を忘却することができるのである。この「忘却」は永続するものではない²³。しかし天才は「異常なまでに強い想像力²⁴」によって、アイデアを長時間把握することが可能である。そのため、自己の身体への意識が再び現れたのちも、把握したアイデアの印象を記憶し続け²⁵、それを芸術作品というかたちで再現することができるのである。

結語

ショーペンハウアーにおけるアイデアとは、通常の認識によって把握された対象の欠陥を、想像力によって補った、事物の理想としてのファンタスマであることが分かった。このようなアイデアが普遍性を持つのは、それを認識する主観が身体、「意志」、自我を持たない純粹認識主観だからである。

しかし注意しなければならないのは、アイデアと純粹認識主観のどちらもが、原因でも結果でもないということである。ショーペンハウアーの考える主観と客観は、常に同時に成立する。今回は、主に主観の側からアイデアを説明してきた。しかしだからといって、純粹認識主観がアイデアを造りだしているという訳ではない。アイデアと純粹認識主観が相互に定立される関係性の上で、美的観照の内実を明らかにしたのである。したがって今後は、時空に限定された感性的身体性を脱した天才が、芸術作品を創造する行為のうちに、どのような認識と実践とが共存、成立しているのかを検討しなければならない。その際、純粹認識それ自体と、天才の感性的身体性との間の関係について、更なる探求が必要であると考

えられるが、それは今後の課題としたい。

(上智大学)

-
- 1 Arthur Schopenhauer, *Sämtliche Werke*, 7 Bände, Herausgegeben von Arthur Hübscher, F.A.Brockhaus, Wiesbaden, 1949. *Die Welt als Wille und Vorstellung*, Band 1 (1818/19), Werke II.

本文中での略記は主著。引用に際しては WI の略号と頁数を本文中に記す。日本語訳は、以下の既訳を参照した。ただし引用に際し表現を改めた箇所もある。

『意志と表象としての世界』I～III、西尾幹二訳、中央公論新社、2010年。

- 2 「すべての人が事物のなかにアイデアを認識するあの能力〔…中略…〕をそなえている」(WI, 229) とあるように、普通人が芸術作品以外においてアイデアを認識する可能性が絶たれている訳ではない。ただ、天才は普通人より認識力が優れているため、高度に長時間アイデアを把握できるとされる。
- 3 「想像力と理性とが合体して可能になるプラトンのアイデア」(WI, 48) とあるように、本来アイデア認識には想像力のみではなく理性 (Vernunft) も必要であるとされる。しかし抽象的な概念を生み出す能力である理性がアイデアの直観においていかにして働き得るのか。本稿は、理性が天才においては、概念形成以外の仕方ですなわちアイデア認識といった仕方でも働き得るという展望を持っている。しかしこの点に関する詳しい考察は、別稿にゆだねたい。理性を特別な仕方ですなわちアイデア認識のために働かせることができるような天才性の内実を、本稿第二節、第三節で扱っていく。
- 4 「想像力は天才性の主要な構成要素だとみなされてきた。いな、ときには、天才性と同一であるとさえ考えられてきた。前の見方は正しいが、後ろの見方は間違っていると思う。」(WI, 219)
- 5 このような観点から、ショーペンハウアーは「ギリシア人がまったく経験的に、ここでは膝、あそこでは胸という風に個々の美しい部分を露出させ、しるしをつけ、その個々の部分を寄せ集めることでさきに揚げた人間美のあの理想を発見したのだという意見…は間違っている」(WI, 262) と述べる。「美」とはアイデアを観照することで生じる感情である。つまり「純粋にア・ポステリオリには、つまり単なる経験だけからでは、いかなる美の認識も可能にならない」(WI, 261)と彼は考える。
- 6 Arthur Schopenhauer, *Sämtliche Werke*, 7 Bände, Herausgegeben von Arthur Hübscher, F.A.Brockhaus, Wiesbaden, 1950. *Ueber die vierfache Wurzel des Satzes von zureichenden Grunde*, 1. Ausgabe (1813), in: Werke VII.
以下『根拠律』と略記。引用に際して Go の略号と頁数を本文中に記す。
日本語訳は、以下の既訳を参照した。ただし引用に際し表現を改めた箇所もある。
『充足根拠律の四方向に分岐した根について』(第一版)、鎌田康男・齋藤智志・高橋陽一郎・臼木悦生訳著、
『ショーペンハウアー哲学の再構築(新装版) – 『充足根拠律の四方向に分岐した根について』(第一版) 訳解』、
法政大学出版局、2010年。
- 7 ここでは「直接の客観 (der unmittelbare Objekt)」という用語を、「身体」と意識した。『根拠律』においてショーペンハウアーは、身体(感覚器官)を介して認識される客観を「間接の客観」、そして身体自体を「直接

の客観」と呼ぶ。

- 8 本文で略したこの箇所が続いて、「想像力 (Phantasie)」は「構想力 (Einbildungskraft)」に言い換えられる。このような点に注目し鎌田康男は、ショーペンハウアーにおけるイデア論の形成においては、カント『純粹理性批判』の受容と評価が中心的な役割を占めると考えた(鎌田康男「構想力としての世界 - カント『純粹理性批判』演繹論の受容から見る初期ショーペンハウアー哲学の再構築」、『理想』No.687、理想社、2011)。カントの「構想力」を詳細に検討したうえで、ショーペンハウアーの想像力に関して考察することは今後の課題とする。
- 9 ファンタスマは「幻想」と訳されることもある(西尾幹二訳)。しかし天才性が「完全な客観性 (vollkommenste Objektivität)」(WI, 218)されていることから、イデアは「幻想」であってはならない。
- 10 この点に関しては、第三節で扱っていく。
- 11 個体化の原理に「因果性」が加わると、「根拠の原理 (der Satz vom Grunde)」と呼ばれる。個物を時間・空間において認識するためには実は「因果性」も不可欠である(WI,20)。ショーペンハウアーは感覚器官が受け取った刺激を原因としてその結果を見出すことで事物の認識が可能になると考えた。
- 12 時間における個物の把握に必要なのは、持続する身体への意識ではなく、持続する自己意識なのではないか、という批判がありうる。しかしショーペンハウアーは身体への意識なしには自己意識が可能にならないと考えていた。このことに関する詳細は第三節で扱う。
- 13 ショーペンハウアーは純粹認識主観を「身体がなくて翼のはえた天使の頭」(WI,118)と表現している。また純粹認識主観は、その普遍性が注目される際、「ただ一つの世界の眼 (eine Weltauge)」(WI, 233)とも表現される。
- 14 ここから本稿は、イデア認識において主観が失う「意志」を、身体運動と共に把握される「意志」、すなわち「意欲 (Wollen)」に限定している。今後は、ショーペンハウアーにおける「意志」概念が持つ意味を、詳細に区分したうえで、イデア認識と「意志」との関係をより明らかにしていきたい。
- 15 通常と表現したのは、イデア認識という行為が異例として、「生きんとする意志」に支配されていないからである。
- 16 「あたかも対象だけが存在し、それを知覚する人はまるでいないかのように、したがって直観する人間と直観する行為とをもちや分離できなくなって、両者はついに一体となり、ただ一つの直観像によって意識の全体がくまなく満たされ占領されてしまったとかりにしてみよう。つまり、このようにして客観は外のなにか別ものへの相互関係から脱却し、主観は意志に対するいっさいの相互関係から脱却したとのしよう。そうなったとき、こうして認識されるものは、もはや個別的な物そのものではない。それはイデアである。永遠の形相である。[…中略…] このことを通してではあるが、いままさに直観をおこなっている人は同時にもはや個体ではない。個体はちょうどこのような直観の中へ自分を失ってしまっているからである。いままさに直観をおこなっている人は、意志をもたない、苦痛をもたない。時間をもたない、純粹な認識主観である。」(WI, 210)
- 17 「そのときわれわれは、厄介な自我などからは解放され、純粹な認識主観として、さまざまな客観と完全に一体となるであろう」(WI,71) とあるように、直観という行為に同化するということは、直観の対象、客観、つまりイデアと同化することなのである。

- 18 このような観点から Julian young は、アイデアを認識するという事態を以下のように表現している。「芸術家は、個物の代わりにアイデアを把握するのではなく、むしろ個物をアイデアとして把握するのである」
Julian Young, *Schopenhauer*, Routledge, 2006, p130.
- 19 ショーペンハウアーは自分自身の身体以外においても「意志」があると想定する (WI, 148)。すなわち、あらゆる表象が「意志」のあらわれであると考えるのである。そうしてアイデアは「意志の適切な客体性 (die adäquate Objektität des Willens)」と呼ばれる (WI, 206)。というのもアイデア認識においては、認識対象が持っているであろう「意志」のあらわれが、客観的に認識されているからである。
- 20 この問いは、世界原因である「意志」を人間が否定することなどは不可能なのではないか、といったショーペンハウアーにおける「意志の否定」に対する批判につながり得る。こういった問題に答えていくためにも、注14で述べたように、ショーペンハウアーにおける「意志」概念の意味を詳細に区分し、認識と「意志」との関係を考察していくことが重要である。
- 21 他の箇所では「個体としての己の自我の忘失」(WI, 72)、「個体性の忘却」(WI, 66)とも語っている。
- 22 純粹認識主観は、自己の「意志」を認識していないものの、「意志」のあらわれであると言える想像力や理性を用いている。このことから、やはり「意志」が消滅しているとは考えることができない。この点に注目し、鎌田康男はショーペンハウアーにおける「意志」が持つ契機を「超越論的契機」と「弁証法的契機」の二つに分ける。超越論的契機とは認識の制約として要請される「意志」の契機であり、弁証法的契機は意欲の制約として要請される契機である。このように「意志」を、超越論的に要請されるものであるとした鎌田康男の主張は、「意志」を第一原因としての実体であるとする伝統的ショーペンハウアー解釈に一石を投じた。
Yasuo Kamata, *Der junge Schopenhauer: Genese des Grundgedankens der Welt als Wille und Vorstellung*, Symposion 83, München, 1988.
- 23 「意志から自由になったアイデアの把握には大きな緊張—たとえ自発的な緊張とはいえ—が要求されるため、どうしてもふたたび緊張がゆるむときがあり、次の緊張が訪れるまでには長いあいまがあるからである」(WI, 48)とあるように、アイデアの把握は限られた時間のうちで行われるものであるとされる。
- 24 「想像力の異常なまでの強さが、天才性の随伴現象、いな、天才性の条件ですらある」(WI, 220)
- 25 ショーペンハウアーはアイデアの印象を記憶するという言葉は使わず、「思慮・慎重さ (Besonnenheit) が伴う」(WI, 218)といった言い方をしている。